

「完成度の高いサービス(well-established service)」 におけた実践・研究成果発信ワークショップ

行動ウェルネス研究会 <第3回> 研究会のご案内

第3回目を12月7日に開催することになりました。今回の内容は、これまでの通り実践現場からの論文投稿を目指す取り組みに加え、「臨床実践」の質を高めるための事例検討を取り入れていきます。ただし、一般的な事例検討会とは一線を画し、「このような場合にどのような指標が考えられるか」「どのようなデザインが組めそうか」「効果的な独立変数のアイデア」などについて突き詰めて議論していきたいと考えております（クリニカルアドバイザーの奥田健次先生にご登壇いただきます）。

日時：2019年12月7日（土） 13時～

会場：慶應義塾大学三田キャンパス

532教室（西校舎3F）

（三田キャンパスマップ【12】）

定員：100名 参加費：無料

※懇親会：「ワインホールグラマー田町」

（田町駅そばのワインと肉料理の店）

懇親会参加費：4,000円（学生3,000円）



参加申込み：研究会ホームページ、または申込フォームからお申し込みください。<https://sites.google.com/view/behaviorwellness>

***** プログラム *****

受付開始：12時00分～

企画趣旨：12：50～ 山本淳一先生（慶應義塾大学）

第1部：演題発表 13時～17時（発表順は未定です）

・清水元貴（宏和法律事務所：弁護士）

演題：公認心理師時代における臨床家のための法律相談その2
（実践研究における倫理規定、同意の取り方等に関して）

・笹田夕美子（行動コーチングアカデミー/児童発達支援事業所ハンナ）

演題：アスペルガー障害男児に対する犬関連刺激の回避行動への介入の効果（論文査読）

・岩橋瞳（福知山市民病院）

演題：疼痛を訴える小学生女児の歩行行動・登校行動への介入（事例検討）

・森山沙耶（株式会社KENZAN MIRA-i（ミライ）/株式会社リヴァ）

演題「ADHDを背景に持つゲーム依存の大学生に対する支援」（事例検討）

・井上湧斗（赤穂仁泉病院）

演題「乗り物恐怖を呈する大学生へのGoogleフォーム・SNSを用いた介入の検討」（事例検討）

・仁藤二郎（REONカウンセリング・高井クリニック）

公開討論：質の高いセラピストは量産可能か？

・その他、奥田健次先生からのコメント、及び、ミニレクチャー

第2部：パネルディスカッション・オープンディスカッション 17時～18時

第3部：懇親会 18時～20時

第3回 行動ウェルネス研究会

ご参加される皆様へ

今年1月の第1回、そして6月に第2回研究会を開催し、論文投稿（現場からのエビデンスの発信）を目指した取り組みを行ってまいりました。これまでの研究会では、ミッションである論文化への道のりをリアルにお届けできたかと思います。ケースについての概要から、論文の草稿、プルーフリーディング（論文投稿前に仲間内の査読）から論文のバージョンアップまでをご発表いただきました。また、行動分析学の肝でもあるグラフ作成（記録の視覚化）についても、実際の事例を通して勉強することができました。

一方で、臨床家としては、論文には盛り込めなかった部分や、ここがこのケースで苦労した、ここを大事にしてすすめた、などなど工夫されている部分をもう少し詳しく聞いてみたいという感想もありました。そこで、第3回目以降では、

- 臨床実践の中で困難を感じるのはどのような点か？
- クライアントに指標の測定の重要性をどのように説明するか？
- どうすればクライアントの日常生活においてウェルネスな指標を測定できるか？

などのテーマについて議論したいと思います。すでに「うまく実践ができて」「データを測定しながらやれている」という方も、その方法を共有するためにご参加ください。また、データの取り方で苦労されている方、他の先生方の「やり方」を盗みにお越しくください。

近年、精神保健福祉領域(精神科臨床)においては認知行動療法(CBT)か RCT によるエビデンスを備えた心理療法として隆盛を極めています。しかし、認知行動療法の隆盛にも関わらず、精神科臨床の現場レベルでは、実践のエビデンスがほとんど提出されていないのが実情なのです。

その認知行動療法(CBT)には行動分析学のエッセンスを取り入れた方法論が多く存在しています。そして、精神科臨床分野での実践において、行動分析学のエッセンスを取り入れて支援を行なっている専門家は、それと意識していない場合でもかなりの割合になると考えられます。行動分析学は、公認心理師や精神障害支援に関する教科書の中にも取り上げられてきており、今後も幅広い領域のヒューマンサービスの基本的な理論やテクノロジーとしての力量をもっています。

本研究会は、精神保健福祉領域の実践家・臨床家に、①応用行動分析学を現場において実践していくための方法を学ぶ機会(事例検討)を提供し、②現場で得られた実践の効果を、学会発表や論文という形にして公表していく枠組み(事例発表・論文投稿)を提供することを目的として設立されました。

論文を、個人の業績のためだけではなく、未来のクライアントのために書くという趣旨のもと、多くの実践家の方々にご賛同、ご参加頂き、現場レベルのエビデンスを「単一事例研究デザイン」の実践成果・研究成果として集積してゆくことで、「完成度の高いサービス(well-established service)」を発信し、実現していくための枠組みを提供します。

(研究会会長：仁藤二郎)

皆様のご参加と活動の発信から

「完成度の高いサービス

(well-established service)」を積み上げていきましょう！

主催：行動ウェルネス研究会

共催：慶應義塾大学 論理と感性のグローバル研究センター

